

会員だより

「災害査定体験レポート」

沖縄県土木建築部
北部土木事務所
幸地 さくら

1. はじめに

私は、平成15年度に沖縄県職員として採用され、米軍基地の多い中部土木事務所を経て、現在は自然豊かな沖縄本島の北半分を管轄する北部土木事務所に勤務しています。この北部土木事務所に来て初めて災害復旧事業の担当者となり、2度査定を経験し、それほど大きな災害でもなかったのですが、予想通り防災に寄稿することとなりました。というのも、まだ2年目の頃、当時の課長から女性の先輩が寄稿したから、次はあなたの番だよと言われていました。今年で6年目になりそのときの課長は退職されましたが、予言は見事の中し私に声がかかりました。「防災の会員だよりはなぜか女性がよく寄稿しているの、適任者はあなたしかいない」という理由でした。こういうとき私は県職員の中で僅か4名しかいない女性技師なのだと改めて認識させられます。

2. 18年災について

私の初めての災害は小さな単災でした。それでも未経験だった私には高いハードルでした。平成18年11月22日の豪雨後、災害パトロールで未整備箇所を点検していると、天然河岸の崩落を発見しました。周囲は畑が多く崩落現場の河川管理用通路を利用している車両もあり危険な状態でした。第一発見者の私が担当することになり、先輩から「今回は被災から査定まで1カ月しかないからがんばろうね。まずは…」とアドバイスを受けながら現場踏査や資料作成が始まりました。現場で被災原因を見つけるため折れた草本類の方向を確認すると一度溢れた水が再び河川に流入しているこ



平成18年災起点確認状況

とがわかり、流入してくる範囲のみ護岸崩落していたことから、これが直接的な要因だと考えました。すぐにこれらの流水跡や崩落したばかりの護岸を写真に収め、査定時には大変役に立ちました。

延長は崩落跡の下流端から上流端となる既設護岸までの24.6mとし、将来の植生を期待して総単にもあるじゃかごを選定しました。測量や杭、丁張りの設置、図面作成、写真の撮り直し等先輩方の協力を得て、一つ一つ手探りながらもなんとか査定を受けられる準備を整えることができました。準備に苦労した分、査定内容には自信がりましたが、査定日が近づくと緊張し、査定の流れを密かにイメージトレーニングしていました。当日は心なしか化粧を丁寧にし、地声がとても小さいので発声練習をし、職場に向かいました。現場では査定官や立会官をはじめ、総合事務局や県海岸防災課、土木事務所の応援班等、狭い河川管理用通路に大勢が詰めかけ、他から見るとのもの

会 員 だ よ り

のしい雰囲気だったと思います。本番になると、髪は乱れ、声はかき消されまいと叫び声となり、朝の努力もむなしく今振り返ってみると恥ずかしくなります。それでも査定官から満額をもらえたときは嬉しくまたほっとしたことを覚えています。査定までのハードさは印象深く、ご協力下さった先輩方には感謝しています。また仲間が一丸となって共に災査定を乗り越えたという実感があり、私にとって財産となりました。

3. 19年災について

2回目の現場は沖縄県で希に見る非常に強い台風による災害でした。特に東海岸は湾内特有の水位上昇の現象であるサーフビートと満潮が重なり、各湾内で高潮が護岸を越流し甚大な被害を与えました。東海岸に面した東村の福地川は県内最大のダムから放流されるため洪水被害はないはずの河川ですが、平良湾の奥に河口を持ち、台風による波浪が河川を遡上したため、河口から1.2kmまでの土羽護岸はすべて被災していました。特に河口部の被災箇所は河川護岸に沿っている道路が陥没する被害にあい、通行止めとなりました。



平成19年災被災状況

当河川沿いの低地は畑が多く管理用道路を利用しており、また右岸にはダムのケーブルが埋設されているため、早急に復旧が必要でした。

すべて単災で同一河川なので同じような工法ではありましたが、もう一河川を加えて同時に7件の査定を受けることになりました。ところが、査定前に私自身の海外挙式のため約2週間留守が決まっており、前回と同様、業務に当てられる時間は約1カ月というタイトなスケジュールで査定に望みました。今回は業務を委託することになり、コンサルとの調整は、緊急性が高いことをまず理解してもらい、起終点や工法選定の考え方、写真の撮り方を確実に共有することに注意しました。

査定当日はやはり緊張しますが、「和を似て尊しとなす」を思い浮かべると不思議と良い意味での緊張感に変わります。査定官や立会官の言葉にも重みがありますが、申請者の私の言葉にも重みがあるので、伝えたいことは明確にしておきたいと考えます。それは言葉だけではなく、写真や設計書でも表現することが大切だと感じました。この査定では、もっと時間をかけて精査したかったと悔やまれるところがありましたが、災害復旧は私を待ってはくれません。いつでも最小限の時間で最高のものが作れるよう、経験、技術力を高め、日々の業務態勢も見直していきたいと思います。

4. おわりに

沖縄は台風の当たり年になると必ずどこかで災害が起こります。今後もまた災害復旧事業に携わる機会があるかもしれません。そのときはまた頑張ろうと思います。また、日本全国で災害復旧業務を担当されているみなさまにつきましては、無事に被災から復興されることを遠い沖縄から祈っております。